

第21回Zoom三水会記録

日時：2023年3月15日（水）16時～18時

発表テーマ：「報徳思想の根源について 哲学的考察」

発表者：小関栄

司会：小寺隆三

参加者12名

小寺隆三 富沢賢治 岡本好廣 石塚秀雄 中村範子 丸山茂樹 小関 栄 野口幹夫

重原佑治 波治裕美 團野廣一 村澤澄子

報告内容：添付の資料 「報徳思想の根源について 哲学的考察」に沿って説明された。

質疑討論：

岡本好廣さんから下記のコメントメールをいただきました。質疑応答の時間でも同様の発言をいただきました。

「小関さん、今回は克明な資料に基づいて素晴らしいお話をお聞かせ頂きました。80年前に樺太の小学校の校庭に父兄が募金して建てたという柴を背負い、手に本をもって読んでいる二宮尊徳の銅像がありました。雨や雪の時には音楽の先生が「先生は濡れて大変ですね。最初に尊徳先生の唄を歌いましょう。」と云われ、皆で歌いました。「柴刈り縄縷い、草鞋を作り、親の手助け、手習い読書、貧しい中にもたゆまず学ぶ、手本は二宮金次郎」という歌で、子どもたちはいつも銅像のそばで歌っていました。私も今でも歌えます。エピローグで小関さんが報徳の教えはいずれの宗教にも偏らず、属せずに「人道を極めた人間学」である

とお纏めになったのは将にそうであり、それが根源になっていることを再認識しました。有難うございました。」

皆様から尊徳思想がよく理解できたとの好評が寄せられた。また講師も南米のブエンヴィヴィール思想にも通じるとのコメントがあったが、同様に18世紀以降の社会主義構想や現代の社会連帯経済論にも通じるとの意見があった。

尊徳の論文が漢文で書かれていることについて、農民にはどのようにしらしめたのかとの質問に「それは「道歌」で実践的に教えた」と説明された。

当日の録画は次のYouTubeでご覧いただけます。

https://youtu.be/HChsr_5VUiM

添付資料 「報徳思想の根源について 哲学的考察」

報徳思想の根源について

哲学的考察

一、プロローグ……

(一)二宮尊徳の生い立ちと人柄

二宮尊徳(金次郎)は、封建体制下の幕末に小田原在の栢山(かやま)村の農家に生まれたが、大水害に遭遇と両親の相次ぐ他界などによる逆境の中で育ち、他家に奉公に出るなどして幾多の困苦を重ねて、漸く十九歳で生家に戻って独立した生粋の百姓であった。

尊徳は、幼少のころから、稀にみる利発な人で、些細なことでも何度となく熟慮を重ね、何時でも徹底的に追求する研究熱心な人柄で、日常生活でも常に何故と考えて、「一草を以て万理を究める」という性格だった。

同時に働きながらも儒学や仏教についても強い関心を持っていて、近隣の僧侶、医師、儒学者や小田原藩士を訪ねて話をしながら学んでいた。

また、寺子屋や勉強の会にも参加しなかったが、種々な書籍を自ら選んで読書し、多くの知識を摂取するといふ稀な勤勉家でもあった。

二十六歳の時には、服部十郎兵衛家(小田原藩家老)に奉公に出たが、次第に同家の家計再建に携わるようになり、労あつて成功したので、小田原藩主大久保忠真公にも注目され認められるようになっていった。

その後、小田原藩主の命により、同藩の宇津釺之助の野州桜町(現、栃木県真岡市)領三ヶ村(知行四千石)の復興を命ぜられ、一家(尊徳夫妻と子供三人)をあげて桜町に転居、その農村復興に携わることとなった。(尊徳三十六歳)

(二)万物の根源について、尊徳の考察の経緯、

桜町の復興仕法は、当初、順調に進んだものの、着手六年目には次第に難渋、その年の暮れには行き詰まって仕舞い、尊徳は成田山新勝寺に参籠、断食して請願修行を行うようになった。(四十三歳)

これを契機に、尊徳は従来の考え方見方が大きく変わり、復興非協力者を厳しく叱責するよりも高次元の立場から説得に努め、かつ全体を見る一円観になって桜町復興を進めたので、作業も順調に進み、それから後は漸く当初の計画も一段落するまでになっていた。

その頃の尊徳は、昼は引き続き桜町復興作業や青木村

の堤防工事などで働きつつ、夜は遅くまで机に向かつて、この世の哲理を追及し続け、天地自然や人の道のあるべき姿について、本源的な思索を続けていた。

その過程は幾つかの円相図に描いて考察している。

註、円相図とは色々な考えを一つの円内に入れて考えてみる方法であった。これは禅の場合に悟りを啓く方法として、万象を一つの円輪に納めて思考する方法で、尊徳はいつの間にか、寺の僧侶から学んだものであった。

(三)、著作物から尊徳の思考過程を探る

我々の祖先は天地の靈命から誕生したとし、自分の先祖を遡り、命のある生物が誕生する前まで遡り、さらに、この世の始まりまで戻って考察したのである。この世の始まりは、つまり、我々のすべての根源は大宇宙であり、この存在は一元一円の太極からなっている。その太極は「一元、混沌の塊」であり、これが天地に分かれ、開闢(かいびやく)したことにより、この世が始まったと考えたのであった。

註、この大宇宙の開闢の考えは儒教思想から出ている。

こうして考察した論考を、尊徳は十数編の小冊子に残

している。

その小冊子は、直観した書として「天命七元図」「三世観通悟道伝」があり、そしてその根源として「空仁二名論稿」があり、万物一円の書として「一体三行録」「万物一圓鏡草稿」がある。さらに、それらをまとめたものとして「大圓鏡」がある。

開闢により天と地が分かれてから、やがて地上には生物が誕生した。その生物の生成発展過程として「百種輪廻鏡」「万物發言集草案」などがあり、その後も、その関連書として「万物發言集」「悟道草書帳」「悟道理論草案」などと非常に多くの草稿がある。

全ては天地が分れた開闢後に、万物が誕生、生物生成して輪廻を繰り返して進展を成すと考察したのである。これらの考えを纏めるようにして天保五年(一八三四)秋には集大成し、「三才報徳金毛録」を著わしているのである。

本稿では、それらの論考から、尊徳の哲学的な深い考察過程を辿りながら、大地に根差した独自の報徳思想の根源について調べて見ることにした。(前掲の小冊子の大部分は、二宮尊徳全集三十六巻に収録されている。)

二、太極(宇宙)の開闢にて……

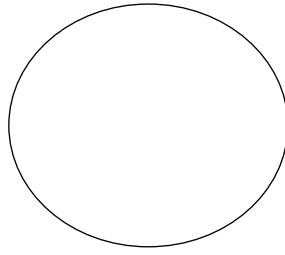
天・地・人の三界が開く

(二)、大宇宙の太極について

大宇宙は果てしない無極(限りない)の世界、これがすべての根元。これを太極と云い、次のように一つの円に描いて太極の図を示している。

これは、一円一元で、天地未だ割けず(割、さける)分れて二つになる)、陰陽分れずに混沌状態である。

◎太極の図と解 (「三才報徳金毛録」より)



「万物は化生する。太極をもって元とする。伝え云う天地まだわかれず、陰陽を分かたない時は、混沌として鶏の卵のようである。それ元一円の大極である。これをそう名づけた。」

今その姿を推しはかるに、空なのでもなく無空なでもなく、有体なのでもなく無体なのでもなく、また、有気なものでもなく無気なものでもない。人力をもって観察の及ばない所である。その一つの元を、名づけて太極と云っているのである。

(二)、太極はすべての根元

不止不転の生命力を持つ

この大宇宙の太極は「一切の対立を越えて不止不転の運動をして、限りなく世界を貫く絶対的生命力」を持つと捉えている。

万物の根元は、「天地悉く元を悟れば一に帰す」と、「万物一体の場」は「天」に至っていると云っている。

(「三才報徳金毛録」より)

そして「宇宙一切の存在を一円相に収め、その第一の事相は時刻の概念で、日月年歳、年々に生滅している。そして第二の事相は空間の概念で、その最も大きなのは天地である。」

すべては限りなく広大な宇宙から出発している」

(「大圓鏡」より)と云っている。

続いて、「この天外に地なく、地外に天なく、これを合して天地は一元にして一大円の中にあり、春秋寒暑朝夕古今みな一理であるとして、その事相は悉く時間の推移を保つ。即ち三世の相、例えば今日は昨日と明日との相を具するが如く往来している。しかもその往来は永遠にして進むに非ず、遅るるに非ず、止まることなく転化

することなく、日行き月来たり、月行き日来る不止不転の如き相であり、一刻生ずればすでに一刻滅す、生滅すれど増減なし。また常に消滅する」と流転の様相を示している。(二宮尊徳全集第一巻四十一頁より)

さらに「一体三行録」にも、宇宙は一元の一体より天地人の三行に発展するという。

思慮の及ぶ処に従って一元一体の「太極」より発して、一つには無限の物質を容れる空間を捉え、一つには無限に存在する時間を想定した。これが天と地に分かれて、開闢(かいびやく)したのであった。

註一、この考えは儒教からきている。「宇宙全体の根元は太極なり無極なり」「ただ一元より古今なし」「一切の対立を包む万有の根元は一円の空極であり、無極で意識を超えたもの」とある。さらに「察聞の及ばざるを無極と云い、一円空である」(周敦頤(しゅうとんい)の太極図説より)

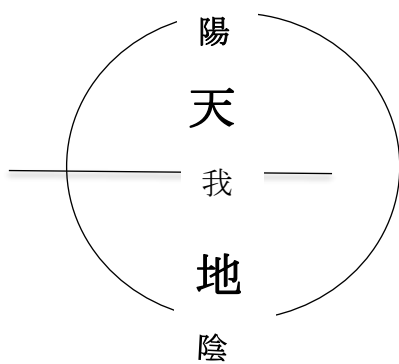
二宮翁夜話にも「太極は思慮の及ぶところ、思慮の及ばざるを無極と云う」「思慮及ばずとて無と云うべからず。遠海波なし遠山木なしと云えども無きにあらず、我眼力の及ばざるなり」(夜話九十九より)と解説している。

註二、大宇宙の一切の存在を、時間と空間の四次元で捉えた

発想は、存在を固定的に考えず、時間とともに刻々変化していると考えたことであり、当時としては画期的な考えだ。これは尊徳より数十年後に、フランス哲学者アンリ・ルイ・ベルグソンが宇宙は混沌とした波(ヌーヴェル・ヴァーク)と発表していることと、正に同じだ。

(三)、開闢かいびやくによって天地が分かれる

◎天地の開闢の図(三才報徳金毛録、大円鏡より)



天地が分かれて開闢となる。それ元一円の体気は分かれて陰陽となる。まだ分かれないう時には陰陽の往来はない。往来無い時は身体がない。身体なければ心気はない。往来が分かれて身体がある。

身体あれば心気がある。身体があれば生死ある。一生あれば一死がある。十死があれば十生がある。天地開闢してから不朽に至る。これ天理自然である。

註、地球の誕生については宇宙の大爆発(ビックバンに

始まることは古くから世界で云われてきているが、日本でこのように開闢という言葉で考えたのは、尊徳が初めてではなかったか。

また、前掲のフランスのアンリ・ルイ・ベルグソンが、宇宙の混沌としたヌーヴェル・ブークが、ビッグバンでエランビタールが創造的に進化し「生命」が誕生したと、二十世紀初頭に発表したことは一世を風靡したものである。

(四)、天地分かれてから、地には人間が誕生

開闢によって天界、地界が分かれ、地界に生物が生まれ、やがて人間が誕生して人界となる。

〈一〉一円混沌の太極から、「天の気一体一行」の天界が開闢する。

〈二〉次に日月出現、天地の気、交流し地界が開け、清濁、陰陽が連動して諸々のものが発生、かつ、それは体と気から成る。

また、茲に生死、有無の世界が開いてゆく。

〈三〉人間が誕生して人界が開く。人間「我」の認識が生じ、人々の間に「相生じ、相養い、相救

い 相助ける道」が出来てくる。

言い換えると「大自然の令命」により開闢、天地が分かれて、地界に万物が生じ、生物が誕生する。そして万象変移、輪廻転生して、やがては人間が生まれたというのである。

(五)人界の「我」について

人間が誕生して、「我」の意識ができた。なお、前ページの円相図には天地の中間線上に「我」と記載しているが、尊徳は「我が身は天から生まれたもの」という考えであるので示したものであり、また、天地の間に「我」を置いた意義は、私の主観的な認識と、人間としての生き方を客観的な観点から考察するためでもあった。

人間はとかく自己の利害を中心として、その欲の眼鏡を持って世界を見ることが多いが、我が身の欲を超越して、「我が身は天」に参じ人倫的立場で人道を実現するのである。つまり、人間は相即して気に偏する傾向にあるので「己に克ち、礼に復する」立場から、人間意識を通じて人倫的次元で判断する「我」について、正しく生きること考察するのである。(詳細は改めて後記する)

三、天道・地道と人道について

(一) 開闢で三界が開き、天地人の道ができる

最初のころ書かれた「空仁二名論」によれば、「宇宙は一円空なるにより地水火風が自然的に生成、天道と地道が形成されたと円相図で考案されている。

また、同じように「万物発言集」にも「それ元は一円混沌也、混沌清濁して天地を生じ、日月現れて昼夜を分かつ……天津神の御代」これぞ「天神七代」の世界が出現したとある。

こうして開闢により天地が別れて、ここに大自然の摂理のよる天道、地道が出来たのである。

あることをあるが儘に即し、これが天地の道、自然の道としたのである。その基本は、「物云わず四時行わるもの成るところ」の天地自然の決まりは、あるが儘に見て、尊徳は「わが教えは書籍を尊ばず、故に天地を以て経文とす」(二宮翁夜話一より)という考えである。

音もなく香もなく常に天地(あまつち)は

書かざる経をくり返しつつ

(二) 天地の恩徳について

開闢により天地は限りなく万物を誕生し、月日の昼夜をめぐりめぐりて寒暑と代わり行き……やまぬ。この一円の気こそ、尊徳が生涯を通じて、その「徳」を感得したのだった。また、万物の根源としての天地の恩恵は必然的に天の徳、地の徳にかえることであった。

「夫れ天地は万物の父母、天地なくば万物なし。万物は生民の父母、万物無くば生民あるなし。故に生民は天地の化身なり。

この故に天地の大恩を知らざれば則ち天地の間に立つべからず、

天地の運動に順いて天地の化育を助けずんばあるべからず」(尊徳全集第一巻報 徳訓五七七頁より)

(三) 人道の誕生

天地が分かれ万物ができ、間もなく人間が誕生、生きるために田畑を開き五穀をとり鳥獣魚貝を食して人間が生育した。さらに、人間は智慧が働き、自然食物以外にも食物を育て文化が生じた。しかし、「人間は自己の利害を中心として、その好く徳の眼を以て世界を見る。

欲望に偏するの余り争奪を事として資格せざるは禽獸と同じである。

人間はそれに相即して氣に偏する理を持ち、

「人道は私欲を制するを道とする。」

ここで人道が定まったのである。

大自然から人の道を見出し、それを自分自身が自然や人間の真理、本質と納得しての理念の人道は「これを誠にする道」である。

こうして、天・地・人一貫の立場で「誠の道を誠にするのが、人の勤め」と究極の結論に達したのであった。

(四)、天道と地道と人道の関連

天道、地道は自然の理で「音もなく香もなく天地の不書の経」を繰り返す世界、人間の関与しない天地自然である。

人道は人のためになるものを善とし、人の為にならぬものを悪とする。天道・地道と人道とは区分するが、その相互関連性は強く、切り離しては考えられない。その事例を次のように説いている。

(以下、いずれも二宮翁夜話より)

○「天道は自然に行わるる道なり、人道は人の立つる所の道、勤めて人力を以つて保持し自然に流動する天道の為に押し流されぬようにするにあり」と、天道は自然で休まないが、人道は努めざれば廢(すた)る。

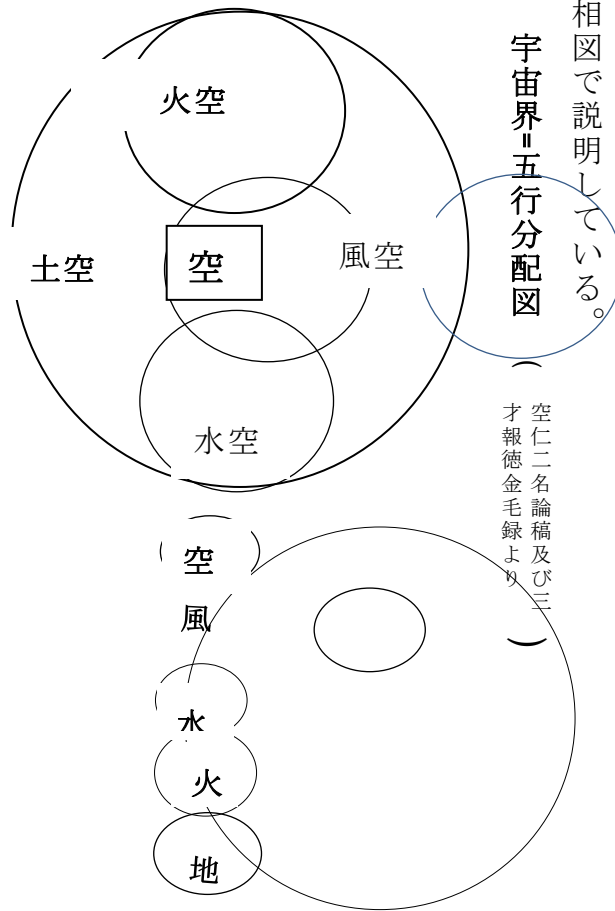
○「天道は万古変ぜず、人道は一日怠れば廢る、されば人道は勤むるを以つて尊しとし、自然に任ずるを尊ばず、人道の勤むべきは己に克つの教えなり」と、で私欲を慎むことを示す。

○「天道は自然なり、人道は人の道に従うと雖も又人為なり 人道を尽くして天道に任すべし、人為を疎かにして天道を恨むこと勿れ」と示し、人道を尽した後は天道に任せよと云っているのである。

四、天道・地道の基本理念は一円空いちえんくう

(二)、宇宙の大自然を支配する一円空

開闢により天地人の三界が開かれたが、この中の天界、地界の大自然を支配する基準は、そこに宿している空風水火地(土)の「五行」から始まると、尊徳は次の円相図で説明している。



宇宙界五行分配図

(空仁二名論稿及び三才報徳金毛録より)

この上図は、五行のうち風水火土の四要素の「気

味」が「空」と和して宿して流れず、かつ全体も「空」と示されている。下図は上の未分離の要素が推転して空風水火地に、その本質を示したことをあらわしている。

宇宙開闢時の陰陽・清濁にしても、また、気と体にしても、さらに前図の風火水地についても、すべては絶対的存在とせず、それらの気味として「有にあらざるにあらざる」「無にあらざる有にあらざる」として、大宇宙のすべて「空」であって、それは縁起によって成り立ち、永遠不変の固定的実体はないという仏教の根本思想から取り入れたのである。この空は開闢前の無極という概念を受け継いだようになっていいる。

註一、前掲の図は、儒教の「易経」(五経の一つ)から「天地万物を生成する原動力は木火土金水の五行(元素)の組成から成っている」としているが、尊徳はこれを参考に、かつ、佛教による地水火風空の「五大」要素を取り入れて、前図の通り空と風水火地(土)と並行して描いている。

註二、「空」と云うのは、仏教の基本的教義で、仏教思想の核となっていて、教祖ブツダの教えである。

仏教では「諸法皆空」や「真空妙有」と云われるが、

我々人間に実体のないことを説く「人空」があり、また、

法「宇宙万物に実体のないことを説く「法空」がある。

この法における万物の存在を、「空」と認識したのは、時間的に変化し消滅してゆく過ぎゆくもので、無常である。一方、事物を事物たらしめる「かた」は時間を超えて保持される。このように変化と永遠、消滅と持続の二面性があり「色即是空 空即是色」。一切の現象・事物は有と認識されるも、その本質は無(空)であると云うのです。

(二)、「一円空」は尊徳の究極の思考

この万物すべてを「一円空」としたのは、「般若心経」冒頭の「照見五蘊皆空」から、

「空則是一 一則是空 色則是一 一則是色」

を取入れて、空は一、色もまた一であるとした。

一は一元の大極。即ち大極の中では空も色も一。大極の中では風水火地の気味についても色(形のあるもの)であり、同時に空(形のないもの)である。(「一体三行録」より)、また「一円空を無極。無極のうちに気味あり、年々和するために流れず。これを空風水火地と云う」とあり、「空は無ではない。その存在が人間意識を超えたもの」であると尊徳は屢々言っていた。(尊徳全集一巻に

あり)

こうして、尊徳は「万物は「一円空」の中にあり、また、すべてが「空」としたのである。

さらに、「すべてのモノの存在は、原因と、それを助けて結果を産む間接の作用、つまり因と縁により乗じたもの」と考えて、すべてのモノは固有の実体のないものとしたのである。この一円空の理念は尊徳哲学の基本になっている。

(三)、有と無の、存在と認識

尊徳の「農業大道鏡」には次の一節がある。

「米麦雑穀、山野の百草百種、平円稜角(四角)その形異なりといえども年々その始めは、根も無く、葉も無く、また根無きにあらず、葉無きにあらず、花無きにあらず、粒々皆その内に充滿して玉のごとし」と目にはモノが生成、転じて見えないものが現れてくる。このことに感動、無から有を認識したのだった。開闢前の一元の大極を意識して、「その体を推しはかれば「空にあらざるにあらず 無空にあらざるにあらず 有体にあらざるにあらず 無体にあらざるにあらず 有氣にあらざるにあらず

無氣にあらざるにあらざり、人力を以て観察及ばざるな

り」と感じていた。これが尊徳究極の考察なのである。

なお、この宇宙の基本の一円空は、尊徳は単に観念的に捉えていたのではなく、現実的に大自然の宇宙は生成発展して「一杯世界の殖え世界」と、根底には「いのち」や「力」が内蔵されていると考察していたのであった。

(四)、有無の認識は心眼で

尊徳は、モノの形や有無を肉眼で見ると判断しないで、無と感ずる。「目に見て、心に思い、心に思い、目に見る」と云う心眼を働かせることで無を掴むことに努めていた。天保四年二月七日の日記にも次の記録がある。

「それただ人は有を言い、有を思う。

非なるかな、今の有の本を知らず」

有りと云えば有りとや人は思うらん

浜の松風の音ばかりして

同様に、無が有と全然無関係ではなく、次のように無は無に終始するのではなく、呼べば山彦のように有の

姿を現すと云っている。

「それただ人は無を言い、無を思う。

非なるかな、今の無の末を知らず」

無きと云えば無きとや人の思うらん

呼べばこたうる山彦の声

このように尊徳は、観察や聞察の及ばぬ部分も単に無と判断しないで、独特の空の世界で悟りの境地に入って、独特な洞察力と心眼で以て、すべてを観ていたのである。

註一、「心眼」とは「心の眼を以て物をよく観る」ということで、単に感覚的に見るといふのは異なり、よく考えて真実を観抜くことである。この観方も般若心経の観自在菩薩の教えからきているものである。

スピノーザの哲学で「永遠の相に於いてものを見る」のも、ここでいう心眼と同じである。

註二、尊徳より約百年も前のイマヌエル・カントは、「純粹理性批判」で、宇宙の根源や神の存在については人間の理性的な認識では捉え難い。理性の限界であると云っている。理性、感性の認識とは異なる

り、改めて悟性による認識を提唱していたのである。

尊徳の悟性から得られた認識(考察)も、正にカントの言う悟性と同じく、直観的な感性による認識や純粹理性からの認識とは異なった仕方の認識で尊徳の云う「心眼で見るといふ悟性に拠る認識」である。この様に科学や理性の及ぶことが難しいところには、悟性に拠って判断するとは、実に素晴らしい捉え方である。

五、人道の基本理念は「一円仁」いちえんじん

(一)、人道を決定づける「仁」

人道を総括して支配するのは、ことごとく人の心から現れるもので、人を人らしくするものである。そこにあるのが「仁」と云うものだ。

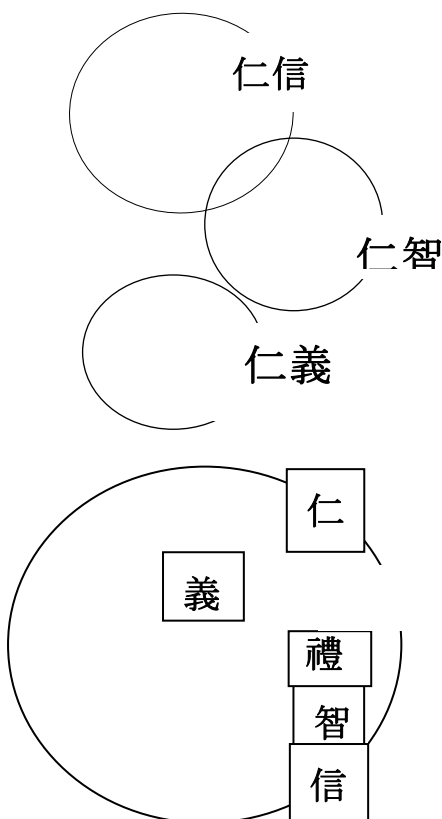
仁とは、自己本位の欲望を、礼にもとづいて抑えることであり、他に対して思いやりを持つことであって、忠(誠)、真心を尽くすことと恕(情け、思いやりの

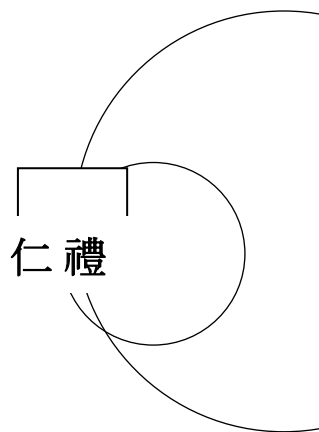
心)の両面を持っていて、すべての徳を総合するもの、天から授けられたもの解していたのである。

註、「仁」は孔子の提唱する道徳観念で、一切の諸徳を統べる主徳として、儒教の道徳思想の中心に置かれて

この仁とは、一体の心より発する五倫五常の人間の行為、仁、義、礼、智、信であり、社会、生活、上の根元になるもので、これこそが正しい人間を形成するものである。これはすべて人間に生ずると尊徳は次の円相図で説明している。

社会界Ⅱ五常分配図 (空仁二名論稿より)





人間社会

を決定づける人倫五常は仁義礼智

信の五つの徳目で説明されているが、尊徳は上の図に示したように仁は高次元で、義礼智信のすべてに掛かるとし「一円仁」として捉えている。

註、三才報徳金毛録の円相図(下の図)は、人倫の五常を仏教における五戒に対比している。これは尊徳が敢えて一円空と同じように儒教と仏教を比べ仁には不殺生、義には不偷盗、礼には不邪淫、智には不妄語、真には不飲酒と並べて考えてみたのであった。なお、尊徳はこのように対比して、人倫の基本の一円仁は儒教も仏教も同じと考えて記載しているが、本表では割愛した。

(二)、「一円仁」の考えが生まれた経緯

人間が真の人間であるには、この仁義礼智信の五つの徳を「一元仁」として人間が心得るべき最高の道徳に位置づけ、この倫理感覚のある人が最高の人と考えたのであった。

人道の最も良い基準が一円仁になった過程は、宇宙の万物が究極的に一円空の大極に帰るとの考えからきていて、そこから人間は私欲を排した一円仁の心境を開き、その上で万物の慈しみを生かす一円仁の心とし、その心をもって自他ともに幸福になれるように助け合って生きべきと考えたのであった。この一円仁の考え方は、孔子の教えから生まれた儒教の発想で、孔子は子弟教育の際の教育目標として、仁義礼智信の徳を人道の基本として「論語」に示している。

- 「仁」を人間行動の核に置き、
- 「義」は人間の行うべき筋道として、
- 「礼」は社会の秩序を保つ礼儀・作法として、
- 「智」は物事を理解、是非・善悪の弁別する心、
- 「信」は言を違えないこと、真の心として、人の行うべき道

と説いている。

この一円仁は儒教の中心理念であるが、尊徳は人間の生きる道とし、天の定めたものとして宇宙界の一円空と並んで基本としていた。

註一、儒教の基本理念として孟子の人倫四端説がある。

(恭敬の心)

禮

羞恥の心)

仁

これは孔子の教えをさらに纏めたものであり、

「仁」は人の心なり、

「義」は人の道、

「智」は弁別の心、

「禮」は社会的なあり方と説く。

これを上図のように人間の理性尊重に目覚めた理念

「惻隱の心」

「羞恥の心」

「恭敬の心」

「是非の心」とした。

(孟子告子上篇より)

(三)、一円仁によって人の徳が成り立つ

天地の理を究明、天地の恵み、つまり、天の徳、地の徳を受けて人は生きると考えている。さらに、人自身が人の徳を示す仁こそが、すべての人間の正しい生き方としていたのである。

正しい生き方で「一切を説く徳の海と化する円融無碍の一

円行動によって、実は一円仁の世界が開ける」(宮西一積著「二宮」宮西一積著「二宮」
哲学の研究」より)と考えたのである。

このように人道の基準として一円仁を考えたのは、尊徳が日常生活の中でも、あらゆる執着を超越して、心静かに洞察する心眼で見抜いて得たものであった。

註一、尊徳は、天界の宇宙は一元空で物の存在を確認すると同様、人界の社会では一元仁の倫理を基本に置いていると「悟り」を得たのである。その時に、その感動を句にしている。

一円仁 御法正しき 月夜かな

このことは尊徳が人生最大の難関に直面した成田山に参籠した翌年の日記(天保元年八月十七日)に記されている。(二宮尊徳全集三十五巻より)

註二、尊徳の悟りは、理性や感性による直観ではなく、心眼での洞察で、前節でも示したイマヌエル・カントの悟性から認識と共通するものである。

(四)、一円仁は誠の道、人を誠にする道

一円仁の五常の倫理感覚を持つことが誠の道、「誠は

天が定めた天の道であり、これを誠にするは人の道」(夜話一より)と尊徳は云い、「万古不易の道理より、誠の道に基づき、これを誠にするの勤めなり」(同)と述べている。しかも、「書籍によらず天地の經文を読み知るべし」と人の真髓に感じ、勤め励めと教えているのである。

この誠の道は報徳実践項目の冒頭に掲げられている至誠で、このように人界を支配する仁義礼智信の一円仁から出発している。至誠実行は人としての勤め、人を人たから占める基本である。

このように尊徳の云う一円仁は、単に抽象的に観念的に云ったのではなく、その精神が人間社会の根源として示し、日常的に実践されることを願ったものであった。人間は至誠という理念を理解するだけでなく「誠にする」至誠の現実に実行することこそ、その意義があるのである。

六、輪廻と因果について

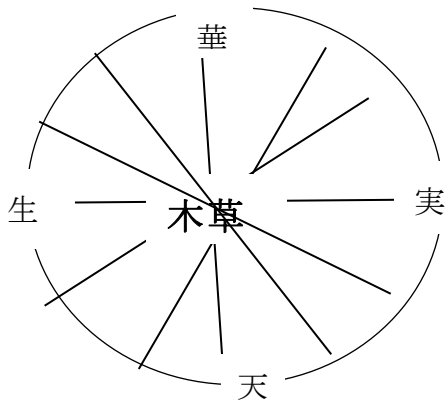
(一)、生命の輪廻について

咲く花は必ず散る。散るとはいえ、また来る春には必

ず咲く。春芽生えた草は秋には必ず枯れる。枯れるけれども春風に逢えば必ず生える。万物皆然り。だから無常も無常ではなく、有常も有常ではない。種と見る間に草と変じ、草と見る間に花を開き、花と見る間に実となり、実となる間に元の種となる。してみると植物は実が本来なのか、草が本来の姿なのか。

このことは尊徳は若い頃から植物が種―草―花―実―種と循環を繰り返して生命が限りなく繰り返されることに強い関心を示していた。

草木花実が輪廻する図(三才報徳金毛録より)



天命、つまり最初にこの天地に生まれたものが種である。
種に随って育ったものが草木、その草木が茂って木に咲くものが花、そして花が咲き終わり、そこに結ぶものを表し召すなる

右上の 図は草木を一例に、天地に生まれた生

命がどのようにに生成進化するかを示したもので、この天

とは天命によって生じた種を云い、その種には生命の根源を宿して、茎、葉を生育し、やがて華(花)になり、実になり種になって、季節とともに種↓草↓花↓実と云う輪廻を繰り返してゆく。こうして天地に生気が満ちてゆく様を見ることが出来る。太陽の光と熱を受け四季の変化と乾湿の作用を受けて種々の草木が芽生えるようになる。種から芽が、芽から茎に、茎から花に、花から実と云う様に輪廻する。「天命七元図」、「百種輪廻鏡」にも同様に、次のように記されている。

一草変化の輪廻
(百種輪廻鏡より)
 種化して草と為り
 草化して花と為る
 花化して實となり
 實化して種となる

種生花實の輪廻
(天命七元図より)
 一種開闢
 年々歳々
 生花實種
 不止不転

このようなことは単に草木に関わらずに、五穀、諸草、諸木などの百種百草が悉くある時間をもって不止不転の循環をしているものである。なお、これは植物に

限らず、宇宙全て事相即ち、天地、夏冬、昼夜が時間の推移とともに輪廻し往来変化している実相である。
(「百種輪廻鏡」より)

註一、輪廻りんねは仏教用語で、車輪が回転して極まらない様に、衆生しゅじょう(一切の生物、生きとし生けるもの)が、三界六道さんかいりくどう(全生物の活動する全世界)に迷いの生死を重ねて留とどまることのないことであり、迷いの世界を生き返り死に代わって何度も流転することを云う。なお、儒教では循環の理と云う。(夜話一一三より)

註二、尊徳は輪廻についての道歌を数多く詠っている。

米まけば米の草生えて米の花
 咲きつつ米のみのる世の中
 去年の実は今年この種となりにけり
 今年このみのり来る年この種

(二)、因果について

「因果の図」(大圓鏡より)

果 心 因

それ元は一円一体、一体因果の為に
変化す。因果悟は一体に帰す。一因果
の為に變転す。萬果悟は一因に帰す。
一果萬因の為に變転す。萬果因悟は
一果に帰す。これ天道ゆえに自然と
云う。

すべて人間の行為は原因があって結果がある。これを因果性と云い、個々の心の持ちようで決まると前図のよう
に示している。

「善因は善果を生じ、悪因は悪果を生ず。原因は必ず結果を招き、結果は必ず悪因に報い、因果の理、さらに違えることなし」と、「結果の顕れぬ先に原因を善くすべし」。(夜話続三十七より)さらに「禍福・吉凶は、方位・日月などに関する処にあらざらず因果である」と徳行の論理にしている。

すべての行いによる結果は、その原因があるので、修身、自己維持の論理付けにしていた。

因果応報と云うと、一般的に偶然的な「運」か、或い

は宿命的なものと考えられ勝ちであるが、尊徳は必然的なものと解し、自らの行いを意識的に運を開拓して行くべきと云っている。だから、このように因果応報は尊徳の信念で、各地からの復興支援を要請された際も、直ちに仕法実践をするのではなく、衰退した原因をよく反省させ、その原因を先ず取り除くことを申し渡していたのである。道歌にも示している。

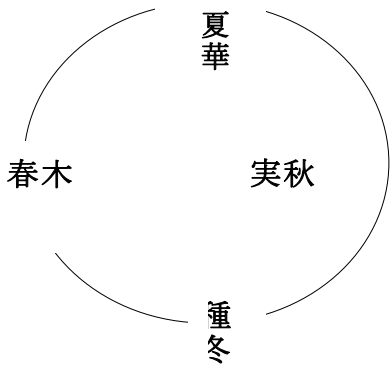
田を深くよく耕してやしなえば

祈らずとても米やみのらん

(三)、輪廻と因果の関わり

百種百草などに限らず、生命あるものはすべてが悉く不止不転の輪廻によって、生命の連続を示している。次の「因果輪廻の解」は、その中に種草花実の四世の因果を明らかにしている。

「因果輪廻の解」



「米を蒔いて米が実り、麦を蒔いて麦が実るは眼前にて年々歳々違わず、天理なるが故なり」(夜話残編二十九より)と尊徳は納得していた。つまり、一切の植物は同一の種に帰し、時期により種↓草↓花↓実と変化し、しかも因果性のある「氣」で変転し「不止不転の輪廻を繰り返す」と日常の農作業の中で実感していたのだった。

註、すべての物が因果性の「氣」をもって輪廻し循環すると洞察したのは、当時全世界でも全くなく、メンデルの法則の発表前で、画期的なことであった。

さらに尊徳は、この輪廻の理法を人道の内に持ち込む時は、行為と心情の因果律になると考え、この因果輪廻の関係を次の道歌に示している。

はるの野に芽だつ草木をよく見れば

さりぬる秋に実法る種種」

また、心情の因果輪廻については、次の道歌に示すように人道を支配する「仁」からである。

仁心を発すれば、仁友を聚(あつ)め、

仁行を尽くし、仕事と為る

つまり、一心百草として、一心の発する所因をなして仁義礼智から哀樂邪正に至る百種の心相については、すべて仁から出た四世(発・聚・盡・爲のこと)の因果である。

(二宮翁夜話二二二より)

註、尊徳は、徳を中心とした善政を施せば国に繁栄と福祉を齎し治世が輪廻するが、「我」を中心とした政治は

乱世が輪廻すると説く。(三才報徳金毛録より)いずれにしても、輪廻と

因果の関係は、行

為と心情の両面

から極めて密接

に係り合っている

るのである。

体種に至れば生育の気を含み、

体種に至れば生育の気を含み

体氣に至れば華はなの咲く気を含み

(四)、生死は天命、世の中は諸行無常

万物が不死不転の輪廻を繰り返すと云うのは、仏教でいえば諸行無常で、無常も無常でなく有常も有常でない。これが人間界では、「我」が出て、惜しい、欲しい、憎いなどと云う感情が出てきて、これが、みんな迷いの原因となり、また、人を恨み、人を妬み、人に憤りなどの種々

の悪い結果に結びついて行く。生死の往来は天命であり、そのため我の心情を滅して天命に随うことである。

見渡せば、生死生滅はなかりけり

己おのれの住処にぞある

また、生き物の生死ばかりでなく、天地間の万物は經文の「色即是空、空即是色」のように、空(眼に見えないもの)と云つても何もないのではなく、空の中に「氣」があり、氣があるから、また色(形、眼に見えるもの)になると云つているのである。(二宮翁夜話六十六より)

有る無きの世のありさまをよく見れば

氷と水の名のみかわりて

註一、「運命」についての尊徳の考え方について、

「天運循環して往きて復らざるはなし」で、運命と云うのは、人間の意志に関わりなく、天の命によって支配されるもの、人間の力を超えた自然の理、所謂天命である。あくまで人間を超える天地自然の理と考へ、一般的に廻り合わせと捉えていたのである。

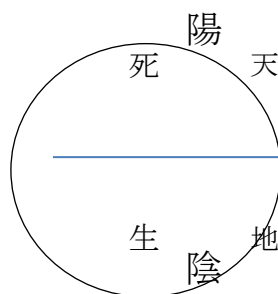
註二、尊徳の人生観と死生観

尊徳は、常に「正しく生きる」ことを人生最大の目

標としていた。天禄(天の恵み)を尊び、衣食住を確

保、先ず「生きる」ことを前提に、正しく生きるこ

とを常に心掛けていた。(尊徳翁夜話一二九)そして次



の様な人生観をそれ元一円体気である。体氣に分かれて陰陽となる。

まだわかれないう時には陰陽の往来はない。往来無い時は身体がない。身体なければ心気はない。往来がわかれて身体がある。身体あれば心気がある。身体があれば生死ある。一生あれば一死がある。十死があれば十生がある。天地開闢してから不朽に至る。これを天理

右のように、一円混沌の宇宙が開闢して、体と

氣が生じ、それが作用して陰陽が生まれ、陰陽の

働きによって天地に万物が生じ、やがて人間が誕

生した。こうして身体と心気(精神)を以て誕生し

た人間も、やがては死がある。生あるものは必ず

死があり天空の彼方に還つてゆく。しかし、それ

は決して天地の外に飛び出してゆくものではな

く、生死はこの天地一円の中にある。死んだと思

えば生まれ、生まれたと思えば死に、一つの生が

あれば一つの死があると云う様に陰陽も生死は無限の循環が繰り返される。これは天地自然の理である。つまり、すべては「体気、陰陽」の往来で生物が生じるは因果の結果、繰り返し(輪廻)しているのである。それは、その中に心気を宿しているからである。(夜話一二九より)

「正しく生きる」とは、人の徳性たる「仁」を以て、本来備わっている「気」で生きることである。

その生きる源は「生きる気」である。その為には衣食住を確保することは言うまでもない。だから貧しい人を救い、困った人を助け、地域を起こし、村や家を再興するのも、すべては衣食住を確保の為、先ず、人間の持つ「気」を漲らせることである。これが尊徳の正しく生きる理念であり、自身でも、この正しく生きる「気」を一生涯にわたり最も大事にしていたのであった。この「気」が失せて体から離れた時は人としての寿命を全うし、死に至ったと認識していたのである。

そして臨終の日の日記に、次のように記されていた。

「鳥の正に死なんとす その言や善し 慎め
慎めや、速からことを欲する勿れ 速からん
ことを欲すれば大事を乱る 倦むこと勿れ
終り

七、徳の尊重と報徳の実践

(一) 全てのものに徳がある(万象具徳)

開闢して万物が誕生して以来、すべてに、それぞれ固有の優れた価値、則ち徳が備わっている。殊に、人の徳を相互に認め合うことは社会生活では絶対必要なこと、ここで改めて人の徳について考えてみたい。

徳というのは人の善の元となるもので長所、特性、美点など優れた固有の価値を指し、徳目、徳育、徳性、徳行などともに人の善さを示すものである。「徳の高い人」とか「徳の備わった人」とは均整の取れた精神の持ち主で、気品、意志、温情、理性、忠誠、勇氣、誠実、自信、謙虚、などに優れた人間性を持つ人を云う。また、「徳を修める」とは自ら身を修め、他を感化する精神を高めることであるし、「徳を授かる」は神仏から加護され恩恵を受けることである。

註一、徳と云う文字は語源からして行人偏に真っ直ぐな心である。辞書によれば「心に得て行いのあらわれるところ、人道を悟って行為にあらわすことであり、倫理学上で最も重要な概念」とある。英語でも *Virtue* は徳、美点であり、「*Bestow* (与える、恵む)」、*Profit*(利益)の意味も含まれている。

註二、徳は古くから洋の東西を問わず西洋では、ギリシャのソクラテス、プラトンからアリストテレスが、また東洋では儒教(孔子・孟子)や道教(老子・莊子)、日本でも神道、仏教の核心であって、この

徳を特に重要視している。

(二) 徳を以て徳に報いる(以德報徳)

「徳に報いるには至誠と実行である」(夜話二三九より)で、報徳実践が人道である。つまり、時間的空間的な隔たりを越えて、よく勤め、良く徳を積み、自他相互に悦べるよう譲り合い、天地人三才の徳に報いるのが徳に報いる基本であり、生きてゆくために必要な行為になってゆく。

尊徳は「わが教えは徳を以て徳に報いる道なり、天地の徳より、君の徳、親の徳、祖先の徳、その蒙る処の人々皆広大なり、これに報いるに我が徳行をもつてする。」(夜話一二八より)と、自ら以德報徳を示していたのであった。

なお、この徳の恩として、考えられるのは、次の通りである。(下程勇吉著「尊徳の人間的研究」より)

○過去、現在、将来の三世を貫く徳、

「勤・儉・讓、仁・義・礼・智・信」

○自他相互一円の両全的な共同性の徳、

「父子、夫婦、君臣、朋友、長幼」

「貴賤、貧富、士農工商、国郡、鄉村」

○時空を超え自他の間を媒介する万物の徳、

「天地日月星、木火土金水風」

「田畑、山林、河海などの自然」

「衣食住、金銀財宝、米麦」。

このように多岐にわたる天地人のあらゆる徳のお陰で生きている。お互い同士もそれぞれの徳の恩恵を受けているので、これに報い相互に感謝の念を持つべきである。

なお、「大学」(四書五経の一つ)には次のように示されている。

「大学の道は明德を明らかにするに在り」さらに、「大人が学ぶべきことは、人が天から授けられ生まれ持った輝かしい徳を、濁りを除き去って本来のように輝かせること」(明德)、

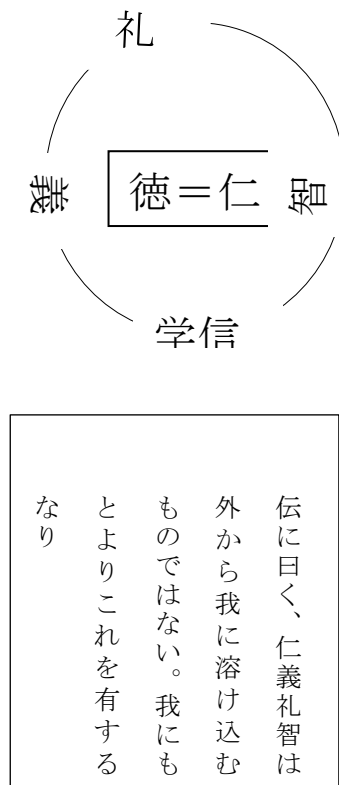
「古くから悪い状態に泥んでいる民衆を教え導き、民を新しくすることにあり(新民)、

この二つを究極の善に確か止まることにある」

(止善) (矢羽野隆男著「大学・中庸の解説」より)

(三)、報徳の実践(諸行動)

この徳を人の道と決定づけるのは、次の図のように円内に徳＝仁を核とし、義礼智信(学)の道と理想とする人間像である。(三才報徳金毛録より)



註、この図は「天命治世の輪廻の図」の一部である。

右の下の添え書きを解説すれば「人の道は仁、仁を行えば徳が開く。道を行うは義、義は礼の度によって確実となる。礼は仁の実行する智によって適応する。この義礼智を協力する同志の組織があつて社会に信を保つことができる。則ち、仁は義礼智信によって実践され、義礼智信は仁によつて一貫の信念を得る。」(「報徳文献選集」より)

このようにして人間社会には仁義礼智信と云う人の道が出来たのである。

この一円仁によって、人が人たる特色としての徳を表す行動を考察し、自らの身を修め、自己の徳を十分發揮するとともに、他人の徳をも見出し、人間社会のために役立て万人の幸福に尽くすことが人の道である。

これを現実に当てはめて徳が發揮される社会の態様を、次のようになり、安寧社会は永続すると説いている。(前出の「天命治世の輪廻の図」より)

明政……政治が明朗になる

励民……人民は各自の業を励む

開田……田畑は開け産業は興る

惠民……民衆は恵まれる

下治……民は争わないからよく治まる

守法……下が治まれば法を犯さない

省刑……法を守れば刑罰は減少する

臣信……刑が省かれ官吏は信じられる

衆聚……人口増加し衆民が集まる

国寧……国は安寧

上豊……上は豊かで子孫は繁栄する

以上のように、徳のある人が集まり、徳のある

政治が行われれば治世は永続してゆく。

註、三才報徳金毛録には、これに反するものとして「天命乱世の輪廻の図」を描いている。乱世には徳の元である義礼智信(学)のない「我」が起る。治心から道を学ぶことを怠れば乱世を生ずる。義と礼は我欲のためであり、それは信を得られず、友を失う。これが政治で行えば闇の世の中になり、人は正しい業を失い、田畑は荒廢する。人民は利益を奪い合い、法を犯すものが多くなる。管理は權威を欲しい儘にする。このような政治は人民の離反、国家の基礎は危うくする。人が人たる徳を失い、政治も徳政を失えば乱世になると示されている。

(四)、報徳の教え、「報徳訓」、

人間が人間として有意義な人生を過ごすため、人間の中で自己の存在を確認し、天道地道の間で、人道をどのように調和させて生きて行くか、自分

は周りの人々とともに、どのような生活をし

かにつき、次のよう

偈力

産業

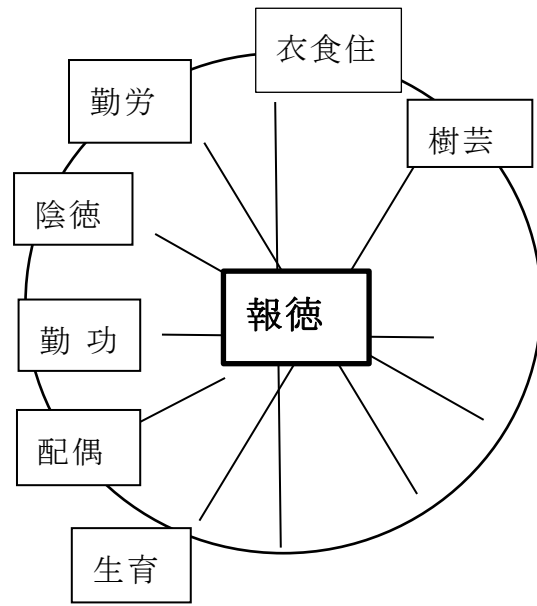
艱難

年歳

命靈

たらよい
な円相図

に示していた。



註、この図は、天の靈命から始まり、生育、配偶、勤功、

陰徳、勤勞により衣食住を確保、田圃果樹、産業を盛んにし、

これからの生活のため、今の艱難辛苦を超えて行くけつりよく竭力

(一力を尽くす)と生活の理念を图示したものであった。

さらに、この教えを次の十二句、百八文字に凝縮して次のような報徳訓を示したのである。

報徳訓

父母の根元は天地の靈名にあり
 身体の根元は父母の生育にあり
 子孫の相続は夫婦の丹精にあり、

父母の富貴は祖先の勤功にあり
 吾が身の富貴は父母の積善にあり
 子孫の富貴は自己の勤勞にあり、
 身命の長養は衣食住の三つにあり
 衣食住の三つは田畑山林にあり
 田畑山林は人民の勤耕にあり、
 今年の衣食は今年の産業にあり
 来年の衣食は今年の艱難にあり
 年々歳々報徳を忘るべからず

註一、尤も、この報徳訓は、この前後数年間に何度も何度

も推敲を重ね、その上で、このように凝縮されて、漸

く天保五年(一八三四)秋、「三才報徳金毛録」に発表さ

れたのである。(二宮尊徳全集第一卷より)

八、エピソード

尊徳は成田山新勝寺に請願した時から(五年後に「三才報徳金毛録」を発表)、人間の正しい生き方として人道を極めるについて、深い哲学的考察を重ね、「報徳の考え」からあらゆる徳に感謝して報いることを悟ったものであった。そして、この報徳の

考えを、生涯を通して、生活上も仕法展開上も実践に努めてきたのであった。謂わば、尊徳は報徳の考えの創始者であり、また、それを如何に実現するかの実践者であったのである。

その報徳の教えについて、尊徳自らも次のように語っている。

「神道は開国の道、儒教は治国の道、仏教は治心の道なり、ゆえに予は高尚を尊ばず、卑近を厭わず、この三道の正味のみ取れり」

「正味とは人界に切なるをいう。切なるを取りて切ならぬを捨て、人界無常の上に立つ。」

「戯れに名づけて、この教えを**神儒仏正味一粒丸**という。」(二宮尊徳夜話二二一より)、

確かに、尊徳の教えは、その源流が神道、儒教、仏教からの教えではあったが、その教えの真なる意を汲んで、尊徳流によく纏めて、「人として正しく生きる」ことを自らも実践し、他にもよく教え、実効が上がるよう努めてきたのであった。

このように報徳の教えは、いずれの宗教にも偏らず属せずに「人道を究めた人間学」であったの

である。しかも、これは単なる倫理や学問というよりも、人として実践する所に最大の意義があるとして人々に普及してきたのであった。

なお、この尊徳の報徳の教えを報徳思想として体系づけ、さらに一層の普及に努めたのは、尊徳四高弟と云われる富田高慶、斎藤高行、福住正兄、岡田良一郎と、子息尊行と孫の尊親たちであった。

終り

—参考文献—

- 二宮尊徳全集 佐々木信太郎編(龍溪書社)
- 天道と人道 下程勇吉(岩波書店)
- 二宮哲学の研究 宮西一積(理想社)
- 二宮翁夜話精説 福住正兄原著、八木茂樹訳

- 二宮先生語録(上・下)富田高慶原著佐々木典比古訳
- 二宮尊徳の人間的研究 下程勇吉著(理想社)
- 補注報徳記(上・下) 富田高慶原著佐々木典比古訳
- 報徳文献選集 佐々木信太郎訳注編(一円融合会)
- 報徳仕法史 宮西一積著(一円融合会)
- 報徳叢書 佐々木信太郎編著(報徳文庫)
- 日本思想体系「二宮尊徳」(岩波書店)
- その他

以上